様式２

平 成 27 年 度　自 己 評 価 表

鳥取県立琴の浦高等特別支援学校

中長期目標 (学校ビジョン)	キャリア教育に重点を置き、地域の中で職業的に自立するとともに、主体的に活動、社会参加し、社会に貢献できる人を育成する。そのために、学校生活の基礎基本を確立し、主体的に活動しようとする意欲を育てる。	今年度の 重点目標	○基礎基本の確立と、意欲の涵養 ○社会人としての基礎力の育成 ○進路保障と社会参加への支援

		年度当初				最終評価		
評価項目		評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策			
○基礎基本の確立・意欲の涵養 ○社会人としての基礎力の育成 ○進路保障と社会参加への支援	教務部	○各分掌の運営がスムーズに行えるように会議や連絡の調整を図る。 ○教科年間指導計画の見直しと修正。	○3学年揃って職員も増え、放課後に会議が集中し、調整が十分できていない。 ○全学年の計画は作成したが、実際に活用をするのは今年度が初めてである。	○早めに日程調整ができ、各分掌運営がスムーズにできている。 ○指導内容の修正や学年間の系統性の見直しができている。	○各部担当者との連携を密に図り、月行事等の一覧表にもれのないよう記載をする。 ○学科、教科会と各担当教科で修正、検討を実施	○担当者と事前の打ち合わせを行い、月行事等にあげたが、再調整をすることがあった。 ○3年間を見通して各教科で指導内容や系統性について検討・修正を実施。	B B	○可能な範囲での会議や打ち合わせ時間の捻出や、会議の精選を図る。 ○各教科における指導内容や教科間の関連について検討・修正を継続して実施する。
	学習部	○「全体計画」「年間指導計画」の見直し修正及び次年度の年間指導計画の作成(人権教育・道徳教育・福祉教育・図書館教育) ○授業づくりプロジェクトの実施 ○図書館教育の充実	○全体計画は人権教育・道徳教育は作成済みである。 ○年間指導計画については、人権教育・図書館教育は作成済みである。 ○授業づくりプロジェクトを通して『琴の浦の授業』について共通理解を行う必要がある。 ○図書館教育に関しては生徒や職員が活用しやすい図書室経営の充実を図る必要がある。	○「全体計画」「年間指導計画」の修正及び来年度分の整備が完了している。 ○各教職員が、授業づくりプロジェクトの取り組みを通して、本校における学力向上に向けた取り組みを理解している。 ○各種掲示やイベントを予定通り実施し、昨年度より貸し出し数が増加している。	○未作成の全体計画及び年間指導計画に関しては、学習部長が原案提案し、各部員で検討し作成する。 ○すでに作成されている全体計画及び年間指導計画作成については学習部長を中心に各部員で修正検討を実施する。 ○授業づくりプロジェクトを実施しその取り組みを充実する。 ○提示やイベントを実施し、貸し出し冊数を増やす。	○「人権教育」「道徳教育」「図書館教育」「福祉教育」 の年計作成 ○「授業大好きプロジェクト」　2回実施 ○「おすすめ図書」「ブックフェスタ」「新春イベント」の実施。総参加者数219名。 ○貸し出し数昨年1月一人平均42．9人。今年1月一人平均48，4人に伸びた。	B C B	○「人権教育年計」の見直し ○「授業づくり」に関しては、来年度は4月に「授業づくり」の方向性を示し、共通理解の下進める。 ○授業での図書室利用計画の作成。
	学科部	○地域との連携先の拡充 ○基礎的基本的生活習慣の習得 ○専門的知識や技術の習得	○3学年が揃い、現況のままの連携状況では手狭間がある。また、カフェ運営も2つの学年が単独で行うためには集客の工夫が必要である。 ○まだまだ基本的な挨拶や対応方法が定着しておらず、特に来客者への対応が積極的でない。 ○コースによって技能検定項目が設定されつつあるが、全コースではない。	○連携先が増え、各学年が地域に出向くことができている。また週2回のカフェ運営がスムーズにでき、かつ全コース間の連携ができている。 ○廊下でのすれちがい時や、教室内での見学者・来客者等に積極的に挨拶できる。 ○校内技能検定を、全てのコースごとに実施する。	○新たな生産農家や企業を開拓し、調整を図り作業体験ができるようにする。 ○年度当初から、全コースで職員が中心となって積極的に見本となる動きをすることで、生徒が取組やすい雰囲気を作る。 ○昨年度実施したものをふまえ、生徒の達成しやすい目標を考えた検定を作成し実施する。	○地域企業および農家、施設との連携数が増え、地域へ出向くことが昨年よりもさらに多くなった ○あいさつの手本を職員で極力行った結果、下級生ほど積極的なあいさつができた。 ○農業を除くコースで技能検定を実施することができた。	A C C	○今後も校外での学習活動を継続的に行う。 ○手本を職員が見せることを継続し、新学年にも浸透させる。上級生には継続的に指導する。 ○技能分野に囚われずに、知識分野での検定を農業では取り入れる努力を行う。
	指導部	○規範意識の向上 ○地域で挨拶ができる生徒の育成	○校則や交通規則の大切さは知っているが、　　実践できない面も見られる。 ○登下校中の自発的な挨拶が苦手。	○校則違反や交通事故の減少 ○登下校中に出会う地域の方や来校者に自発的に挨拶ができる。	○校則や交通規則をわかりやすく提示できる工夫(スライド教材や掲示物) ○教師自ら実践、巡回して啓発を行う	○校則に抵触し謹慎指導を行う件数は生徒増加分に対し減少した。交通規則については法改正の趣旨や遵守事項について教材を作成した。 ○朝の立ち番・巡回と夕方の駅の見回りの時に教師から率先垂範を心がけ、挨拶ができる生徒が増えた。	C	○規範意識の向上 ○生徒指導状の問題に対し、自ら解決しようという意欲を持つことができる生徒の育成
	学年部	○積極的に挨拶が出来る生徒の育成 ○互いを尊重し合うことのできる人間関係形成	○朝や校内で出会ったときの挨拶の習慣は付きつつあるが声の大きさ姿勢等更なる向上が必要である。 ○概ね落ち着いた生活を送っているが、障がい特性や関わり方の技能の未熟さ等様々な理由から、他者との関わりの中で自己中心的な発言や、相手の意図をくみ取れないことによるトラブルがある。	○80%以上の生徒が自分から挨拶をする。 ○言語環境が整い、どの生徒も安心して学ぶことができる雰囲気がある。	○登校時は玄関に立ち挨拶を行うとともに、月1回程度挨拶の様子を集計し、生徒にも示す。 ○相手の名前を正しく呼ぶ、正しい言葉遣いで接することを励行する。 ○自分を見つめたり行動を振り返ったりする学習を計画的に設定し、自己理解を進める。	❍毎朝職員によるあいさつ指導、生徒会によるあいさつ調べ等に取り組んだ。進んであいさつをする生徒は35%、できつつある生徒45%となった。 ❍正しい言葉遣いの生徒は増えてきているが、定着は不十分である。 ❍自己理解について現場実習等繰り返し学習する中で自覚することができるようになってきた。	C	❍学部として月目標を掲げて全校に周知するなど、力を入れて取り組んでいることを生徒に印象づけるようにする。 ❍良い行動のモデルとして模範となる生徒はどんどん前面に出していく。 ❍言葉遣いについては職員も高い意識を持って継続して指導に当たる。
	保健部	○肥満にならない生活習慣の定着 ○基本的な食事のマナーの定着	○肥満の生徒が多く、県平均の2倍の出現率である。 ○食事のマナーの悪い生徒がいる。 (肘つき、食べながら喋る、犬食いなど)	○肥満指導対象生徒について過食しない生活習慣が定着し、4月体重より減量または4月体重を維持している。 ○給食指導を通して、まわりの人が不快にならない食事マナーが定着している。	○体重測定の継続と繰り返しの保健指導による生活の改善(保健室、栄養士、家庭科の連携) ○給食中の繰り返しのマナー指導(全職員) ○教科連携(家庭科、職業)	○肥満指導をして一定の効果があった生徒もいるが、、精神が不安定で指導が難しく,リバウンドした生徒もいた。過食の生徒に対してクラスで指導のばらつきがあった。 ○クラスによって給食時、指導のばらつきが見られた。 ○性教育で係る教科と保健部の連携が充分でなかった。	B C B	○学校、寄宿舎、家庭と連携を図り、継続指導してい取り組む。 ○担任との連携の強化。 ○食事前、後の立ち振る舞い、給食のマナー等を全職員で継続指導、栄養士による指導も検討していきたい。 ○生徒会保健委員会で、月間目標等を決めてクラスでチェックし、マナー改善に取り組む。 ○年度初めに保健部と学活担当者、家庭科、保健体育で内容確認する機会を設ける。
	寮務部	○寄宿舎マイスター制度の活用	○マイスターの昇格期間を短くしたことで、舎生が自分の目指すべき姿について、見通しを持ち意欲的に取り組むことができるようにした。	○3年生がゴールドマイスターを獲得し、社会生活に必要な力を身につけて卒業する。	○マイスターのチェック表を基に手立てを考える。 ○講座(社会自立)を開設する。 ○1，2年生への指導をしっかり行うことで、3年生に先輩としての自覚を促す。	○マイスター制度を活用する中で個々のチェック項目が明確となったことと講座の学習により、生活の見直しをすることができた。 ○3年生は、寄宿舎卒業となり、生活の模範を意識した生活となった。	B	○マイスター制度が舎生の生活力向上になっているが、寄宿舎以外でも力を出せるよう、いろいろな場を想定して取り組む。個々の目標達成はできているが、もっと高い目標を設定していきたい。 ○継続したチェックで自立生活を補助していきたい。
	進路部	○進路保障と社会参加への支援	○本年度、初めて卒業生が出るため、流れができておらず、今後関係機関と連携を取りながら、進路先の確保を進めなければならない。	○すべての卒業生の進路先が確保されている。	○進路情報を生徒・保護者へ提供できるよう工夫する。 ○進路面談等、できる限り生徒・保護者との相談を多く取る。 ○職場開拓、現場実習を積極的に行う。 ○ワーキングフェスタinことのうらを開催する。 ○関係機関との連携を取りながら、流れを整理する。	○保護者への進路情報提供に努めたが、参観日の参加が少なく十分伝わらないこともあった。 ○昼休憩を利用した進路面談が実施できた。 ○ワーキングフェスタは予定通り実施。他機関の事業と重なり参加が少なかった。 ○東中西の圏域ごとに違いがあり難しい部分もあるが、本校なりの流れができつつある。	B	○保護者への情報の伝達を計画的に行う。 ○学年会に定期的に進路部が参加する。 ○圏域ごとの違いをできるだけ学校として揃えるように工夫する。
		○キャリア教育の推進	○昨年度はキャリア教育とはどういうものか研修を行った。	○キャリア教育推進委員会の主導の下、統一した生徒目標を達成するために教職員が指導に当たっている。	○キャリア教育推進委員会を定期的に開催し、評価・取組の見直しを図る。	○4月にキャリア教育の考え方を示し、以降、関係者で会を3回開催した。 ○挨拶、返事を重点的に取り組んだが、十分な成果が出なかった	C	・年間計画を作成し計画的に取り組んでいく必要がある。
	支援部	○生徒情報の会の充実 ○入学予定者を対象とした入学前体験「ウエルカム琴の浦」の実施	○情報共有はできつつあるが、支援の共通理解と役割分担を明確にしていく必要がある。 ○昨年度試験的に実施をした。	○支援策の役割分担が明確で、職員間で共通理解できている。 ○参加した入学予定者の8割が、実施後のアンケートで活動に満足したと回答する。	○誰が何を支援するのかがわかるように記録をとり、翌日の朝礼で提示する。 ○入学前の不安を軽減し、入学後の生活に見通しを持てるように内容を工夫する。	○生徒情報の会に関係生徒の担任が出席するとともに、翌日までに記録も提示し、支援しやすくなった。 ○入学予定者の不安や疑問に3年生が答える時間や、友だちづくりのためのグループ活動の時間を設けた。	B A	○生徒情報の会で取り上げる内容について、さらに学年部と調整をする。 ○生徒理解やより詳細な支援策検討のための小規模なケース会議を実施する。 ○入学に向けて生徒の不安軽減や実態把握ができた。今後も内容を充実させながら継続していく。
	総務部	○積極的な情報発信と保護者や地域との連携強化	○昨年度、保護者の参加日等参加率は5割強だが学年によって差がある。PTA活動への役員・部員としての参加率は3割程度である。 ○地域ボランティアを立ち上げ、地域との関わりが増えつつある。	○参観日等の参加率5割以上を維持し、可能な限り学年差をなくす。 ○地域ボランティアを活かした新規取組をスタートする。	○参観日や学校からの情報発信に関するアンケートを実施・分析の上、対策を検討する。 ○ミニ参観日(参観おすすめ授業の案内)、校長室談話会、進路指導室開放の実施。 ○ボランティア数を増やし、情報収集を行う。	○アンケートの結果から参観日ウィークを開催。校長室談話会なども実施した。参観日全体の出席数は5割に達しなかった。 ○地域ボランティアには通学見守り・声かけを依頼。増員には至らなかった。	B	○保護者の学校評価アンケートには学校の取組がわかりにくいとの回答も若干名あった。情報発信の方法や内容について再度点検、検討したい。 ○地域ボランティアは継続して依頼、できれば増員したい。

評価基準　A：十分達成　　B：概ね達成　　C：変化の兆し　　D：まだ不十分　　E：目標○方策の見直し
〔100％〕　〔80%程度〕　〔60%程度〕　〔40%程度〕　〔30%以下〕